

雑感 「思考停止の日本」

住職 千坂げんぼう



四月十八日(土)に名古屋を訪れた。新幹線の車窓から見る東海地方の景色は、一関より半月も早く濃さを増した新緑だったが、注視すると大変荒れている。一見、緑の林らしく見えるところは、大半が竹林で、雑木林でも竹が入り込み、やがて落葉広葉樹は姿を消すであろう事が読み取れる状況なのである。

竹林は竹細工の材料や食料としてのタケノコ採取に利用している間は、間伐され美しい景観となる。京都の嵯峨野などでは美しい竹林景観が見られる。しかし、全国的に大半の竹林は厄介者となって放置されている。手入れされない竹林は、地表に日光が届かず草本類が全く生えてこない。一関地方の植林された杉林が放置され荒廃している姿と二重写しになった。

このような感慨に浸ったのは、名古屋市で開催された財団法人森林文化協会主催の「にほんの里フェスタ」に参加する途中だからである。このフェスタは、今年、森林文化協会などが制定した「にほんの里100選」を記念すると共に、これらの里に続く各地の里地、里山の活性化を促すねらいがあつたようである。100選に選定された地域から多くの人が地場産品を持ち寄り参加していた。

パネルトーク「里の力 再発見」では、選定委員の三人がスライドを使い合計七カ所の里を紹介した。嬉しいことに、私が係わっている萩荘地域が最後に紹介され、しかも、他地域の紹介スライドが二枚なのに、萩荘に関しては五枚も紹介された。いかにこの地域が期待されているかが分かり、興奮を抑えることが出来なかつた。

このパネルトークの最後には、「寅さんの似合う里」という題で講演した映画監督山田洋二氏(100選選定委員長)も登壇し、パネルトークの感想を語った。その際、会場から事前集めた質問に答える中で、面白い返答がなされた。質問は「どうしたら、今回紹介された地域のように多様な生態系が保全出来るのでしょうか?」という趣旨であつた。それに対し山田氏は「そういう事はこちらで聞きたいのです。皆さんで考えて下さい。」とまことに簡単明瞭なものであつた。山田氏の回答は、現在話題になつている「思考停止」社会への直截的な答えであつたと思う。

確かに、自分たちの地域の問題は、自分たちで考え、自分たちで解決していかなければならないのに、行政まかせの傾向が日本社会に蔓延しているように私も感じている。

山田氏への質問者同様の思考傾向は、我が一関地方の「世界文化遺産」騒動にも見られるのではない。ユネスコの世界文化遺産に登録されることが、自分たちにとって、どういう意味を持つのかを議論することなくお祭り騒ぎをしているのは、「思考停止」以外のなにものでもない。

観光地としての知名度アップを狙うのなら、ユネスコの世界遺産にさほどこだわることはない。むしろ先日発表されたミシユランのグリーンガイド・ジャボンの評価などを気にした方が良いのではないか。残念ながら町としての評価は、松島が三つ星、塩竈が二つ星、仙台、平泉が一つ星であつた。しかも、松島では三つ星、二つ星が約十カ所あるのに、平泉は三つ星が金色堂で、他は一つ星の箇所ばかりである。

ミシユランの評価に対する異議は、各方面でなされている。しかし、外国人が私たちの地域をどう見ているかを考えずに、観光客増を図ることは出来ない。日本人は互いの欠点に触れないことが多い。それは日本人の美点でもあるが、ともすれば、現実直視をしないことにつながる。厳しい「照顧脚下」が求められる昨今である。

(岩手日報「いわての風」より)